

▼書評

フランク・ユケッター著（服部伸ほか訳）

『ドイツ環境史——エコロジー時代への途上で』

（昭和堂、二〇一四年一〇月、二四三頁、二八〇〇円＋税）

水野祥子

本書は、Frank Uekötter, *Umwelgeschichte im 19. und 20. Jahrhundert, München 2007* の全訳である。ドイツ環境史の研究動向を紹介する際に、代表的な概説書としてたびたび取り上げられており（例えば、田北二〇一一、森二〇一一）、邦訳によって環境史の成果がより多くの人々に開かれることは、たいへん意義深い。著者フランク・ユケッターは、訳者あとがきで詳しく紹介されているように、近年活躍の目覚ましい環境史の若手リーダーの一人である。

まず、本書の見取り図を示そう。二部構成になっており、「第一部 全般的な概観」は五章からなる。「環境史上の『アンシャンレジーム』から工業的近代へと移行する世紀」（一一頁）という一九世紀から、エコロジー運動が高揚した二〇世紀末までを射程に入れ、主にドイツにおける人間と自然との関係の歴史的变化が明らかにされている。「第二部 研究の基本的問題と動向」は一〇章で構成され、各章でテーマ別（環境の理念、森林、エネルギーと資源、汚染と都市衛生、第二次世界大戦以前の自然保護運動、大戦後の「新しい」エコロジー運動、農業、災害）の研究動向と、環境史全般にかかわる問題が整理されている。多くの環境史研究者に指摘されるように、環境史の特徴の一つは、多様なテ

ーマと方法論にある。そのため、概説書を書くにあたって何を取り上げるべきテーマとして選び、どのように叙述するかは悩ましい問題である。本書は、開かれた、それゆえ無定形な環境史という研究領域に輪郭を与えようと試みるものである。

評者はドイツ史の専門家ではないため、本書および著者ユケッターがドイツ環境史のなかでどのように位置づけられるかを論じることはできないが、イギリス帝国の環境史を研究する立場から、気づいた点、気になった点を指摘したい。まず、環境史全般にかかわる論点を整理し、環境史とは何か、いかに研究が展開してきたかを示す。次に、ナショナルな枠組みのなかで議論されることが多いドイツ環境史において、越境や比較というパースペクティブから新たな研究がうまれる可能性について論じる。

環境史は、一九七〇年代初頭から展開した歴史上の人間と自然との関係を分析しようとする研究領域である。一九七七年にアメリカ環境史学会が設立され、専門誌 *Environmental Review*（現在は *Environmental History* と改称）を発行してきたアメリカ学会と比べ、ドイツで環境史研究が始まったのは一九八〇年代であり、研究が本格化したのは九〇年代半ば以降であった。イギリスにおいても、環境をテーマとする歴史研究が活発になったのは、やはり九〇年代後半のことである。

このように、環境史が成立した時期には多少のずれはあるものの、欧米の環境史が展開してきた過程には少なからぬ共通点がみられる。初期の環境史研究は、しばしば一般の歴史学と大きく乖離しているとの批判を受けた。この問題は、環境史の成り立ちと深くかかわっている。第一に、環境史がうまれた背景には、同時代の欧米諸国における環境運動の高まりがあった。環境運動と環境史との密接な関係は、環境史に現代的

な問題との関連性という意義を与えた。他方で、初期の環境史研究のなかには、文献史料による分析が不十分なし恣意的であり、時代背景が考慮されていないものも少なくなかった。また、極端な環境決定論や単線的な衰退史観に基づいた歴史叙述に陥ることもあった。しかし、このような傾向は、環境史内外の批判を受けて今や克服され、人間と自然の相互作用を歴史的文脈のなかに位置づけることが、環境史の基本的な立場とみなされている(九頁)。

第二に、そもそも人間社会の歴史のみを分析対象としてきた歴史学に対するアンチテーゼとして生まれた環境史には、人間の歴史と自然の歴史をどのように架橋するべきかという問題が課せられていた。当初は、人間中心主義に対置される生命中心主義的な歴史叙述が模索されたが、研究が深化するなかで方法的に不可能であるという認識が広がっている(五一―六頁)。さらに、歴史学を超える学問横断的な新しい研究領域として環境史を構想する立場から、独自のメタ理論的概念を構築する試みがなされたが、その多くは環境史研究の発展に影響を与えられず、無視されてきた(一四〇―一四二頁)。こうした試行錯誤を経て、九〇年代後半以降の環境史は、歴史学の一分野として実証研究を充実させる方向へ展開してきたのである。こうして、初期には一般の歴史学とは別の次元に置かれていた、もしくは歴史学の周縁に位置づけられていた環境史は、新たな分野として認められつつあるといえよう。

ところで、環境史はその性格上、国民国家という境界を越える視野を開く可能性があるにもかかわらず、ドイツおよび大陸ヨーロッパの環境史においては相互比較やトランス・ナショナル志向のアプローチは依然としてまれである(七一頁)。アメリカ環境史でも、多くの研究がナショナルな枠組みのなかで行われてきたが、最近では比較や越境というアプ

ローチを強く意識している傾向がある(Suter 2003, Coates 2004)。

一方、イギリスでは、一九九〇年代半ば以降、帝国の環境史というべき分野が飛躍的に展開してきた(Beinat 2007)。一九九五年にイギリスで初めて刊行された環境史専門誌 *Environment and History* の冒頭で、主幹のリチャード・グロウヴは、環境史の中心が急速にアフリカ、アジア、オーストラレイジアなど非ヨーロッパ世界に移りつつあること、さらに、これらの地域では北アメリカやヨーロッパに比べて植民地主義の影響が環境史のなかでより切実な関心事となっていることを指摘した(Grove 1995b)。

一六世紀以降のヨーロッパ諸帝国の拡大は、グローバルな環境変化を引き起こすと同時に、自然資源を持続的に管理し、保全する思想や制度を生み出した。例えば、グロウヴは、グローバルな環境保護主義の起源を次のように説明している。一七世紀、ヨーロッパ人科学者たちは、モーリシャス、セント・ヘレナ、西インド諸島などの熱帯の島々を「楽園」と見なしていたが、種の絶滅や、森林破壊による気候の悪化などを経験、観察することによって、環境を守る必要性を認識しはじめた。これらが植民地間、植民地と本国、あるいはそれ以外の地域との間で形成したネットワークを通じて、一九世紀半ばまでに環境保護主義が広がっていった。このネットワークにアレクサンダー・フォン・フンボルトらドイツ人が与えた影響は重要だ(Grove 1995a)。

さらに、イギリス帝国における森林管理制度の展開にドイツ人科学者の果たした役割に心が寄せられている。一八六四年、イギリス帝国内で初めて設立されたインド森林局にドイツ人が三人続けて長官の座に就いたことはよく知られている。デイートリヒ・ブランディス、ウイリアム・シュリッヒ、ベルトルト・リッベントロップは、ドイツの育林学

をインドに取り入れ、森林法や森林行政を確立した。かれらが森林局長官を務めた約四〇年の間にインドの森林政策の基盤が築かれたといえるだろう。インド森林局は他の植民地に森林管理官を派遣し、各地で森林管理制度を確立するのに貢献した。こうして第一次世界大戦前にはアジア、西インド諸島やアフリカの熱帯植民地の間にインド森林局を中心とする林学ネットワークが形成されたのである。このネットワークはイギリス帝国外にも開かれており、ドイツ領東アフリカやカメルーン、ニューギニアで森林政策が始まると、インド森林局との間で種苗や情報の交換が行われた（水野二〇〇六：二二章、Kirchberger 2001）。

また、イギリス帝国内の林学教育にドイツやフランスの林学が影響を与えていたことも明らかにされている。イギリス初の林学教育機関として王立インド工学技術カレッジに林学講座が設置される一八八五年までは、森林管理官の志願者はドイツやフランスで専門教育を受けていた。その後イギリスの大学にも林学講座が設置されたが、教育の仕上げとして大陸ヨーロッパの林学教育機関で九か月間学ぶことが一般的であった。イギリスには林学を教える学問的な基盤がなかったため、ドイツやフランスの林学専門家に頼らざるをえなかったのである（水野二〇〇六：三章）。ギフォード・ピンシヨールなどアメリカ合衆国における森林政策の創始者たちも、ブランデイスらと親交があり、ドイツ林学の影響を受けていたことが指摘されている（Barton 2002: chap. 6）。一九二〇世紀転換期には、イギリスやフランス、ドイツ、アメリカとそれらの植民地をつなぐ森林管理官のネットワークが存在したのである。

このように、ドイツの林学・森林政策はトランス・ナショナルな環境史研究を生み出しうる格好のテーマであるにもかかわらず、ドイツ環境史においてははその国際的インパクトが注目されてこなかったことは意

外である。ドイツ側の史料から、熱帯植民地の環境についていかなる認識が見出せるだろうか。イギリスやフランスなどに比べて圧倒的に期間が短かったとしても、独領アフリカにおける資源管理や土地計画の経験は、ドイツにいかなる影響を及ぼしたのだろうか。「東部総合計画」（四三頁）に何らかの示唆を与えなかったか、など興味は尽きない。ドイツ環境史において植民地主義、帝国主義というパースペクティブは、国際的視野をもつ研究の可能性を開くのではないだろうか。

また、比較という観点から好奇心をかきたてられるのは、大戦間期ドイツの農業や林業におけるオルタナティブ志向である。農業の機械化や化学化に対してバイオダイナミック農法という有機農法がうまれた（二七頁）。また、収益性を重視する立場から針葉樹の同齢林をつくり、皆伐するという近代林学の基本原則に対して、多様な種が存在する混交林を持続的に利用するという恒続林概念がうまれた（三八頁）。こうした動きは、ドイツ史の文脈では多かれ少なかれナチスのイデオロギーと結びつけて論じられてきた。しかし、同時期、他の地域でも同様に近代科学のオルタナティブを志向する動きがあったとするならば、どのように読み替えられる可能性があるだろうか。

英領インドでは、アルバート・ハワードによってインド農民の伝統的な農法をもとにした有機農法が提唱され、イギリス帝国内外に広まっていた（藤原二〇〇五）。また、イギリス帝国の森林管理官のなかには、森の多様性を最小化するドイツ林学は熱帯の森林生態系には不適當だとする意見がみられるようになり、有用樹の単純林を理想とする近代林学の原理に疑問が示されるようになり、混交林への関心が高まっていた。こうした林学の新たな展開には、大戦間期に発展した生態学と土壌科学の影響があると考えられる。これらは、熱帯植民地の生態系や慣

習的な土地利用と、ヨーロッパの近代科学との遭遇によって生み出されたものといえよう（水野二〇一〇）。このように、近代科学のオルタナティブという現象がドイツ以外でも展開したとすれば、バイオダイナミック農法や恒続林の思想をナチズム以外の文脈からも説明される可能性があるのではないだろうか。あるいは、これらの思想の特異性がさらに明確になるかもしれない。いずれにしても、ドイツの経験をより広い文脈の中に位置づけることによって、新たな発見があるのではないかと期待されるのである。

もう一つ、比較から示唆を得ると思われるのは、一九八〇年代に急展開したエコロジー運動にかんする研究である。原子力発電所に対する抗議運動や「森の死」をめぐる議論を契機として市民に広がった新しい社会運動が緑の党の発展へとつながる動きは（五三一―五五頁）、ドイツが世界でもっとも環境運動が盛んな国の一つとなった、いわば成功譚として語られている。しかし、「市民」とはいったい誰を指しているのだろうか。著者は、エコロジー運動の参加者が高学歴の中間層の人々に偏っていることを指摘し、運動の担い手の社会的多様性について再検討が必要だと主張しているが（二二三頁）、この問題はきわめて重要だと考えられる。

近年、階級、エスニシティ、人種、ジェンダーなどの違いによって人間と自然とのかかわりに多様性がうまれるという点が注目されている。アメリカの環境史研究は、環境問題と社会的マイノリティを結びつける新たな問題意識に基づき、研究対象を従来の白人中産階級男性から非白人や労働者階級、女性へ広げること、より重層的で複雑な歴史叙述を可能にした。例えば、国家の資源保全政策の下で資源管理の主体から排除された人々——アメリカ先住民や非白人移民、地元の労働者階級など

——がいかん資源を利用し、保全してきたかを明らかにする研究は、都市の白人中産階級のものともなされてきたアメリカの環境主義の読み替えを迫ると評価されている（Jacoby 2001）。

インドやアフリカの環境史においても、植民地期および独立後の国家と社会の「周縁」に位置づけられた人々との資源の管理をめぐる関係性が問われてきた。例えば、北インド・ウッタラーカンド地方の地元住民が地域外の業者による商業目的の森林伐採を阻止しようと木に抱き付いて抵抗したチプコー運動（石坂二〇一一）の研究で知られるインド環境史の先駆者ラマチャンドラ・グハが唱える「貧者の環境保護主義」、すなわち、「南」の人々は貧しいがゆえに環境保護意識をもつことができないのでなく、逆に、貧しいからこそ自らの生活に直結する環境を守ろうとするという主張は、大きな影響を与えてきた（Guha 2000: chap. ⑤）。彼の議論には「南」の現地住民の慣習的な土地利用がエコロジカルなものであるという前提にたっているという批判もあるが、自然管理の主体から排除されてきた人々の自然へのかかわり方に目を向けさせた点は重要である。こうした研究は、ドイツのエコロジー運動の研究にさまざまな問題を投げかけている。誰が運動の主体であったか、運動に参加しない人々は環境意識が低いのか、それとも参加者とは異なる環境意識をもっているのか。ドイツ環境史はこうした問にどう答えていくのだろうか。

最後に、本書のように包括的な、バランスのとれたドイツ環境史の概説書が翻訳されたことは、二重に意義深い。まず、ドイツ史を学ぶ者に、自然と人間社会との相互影響を歴史的に考える重要性和面白さを教えてくれる。さらに、ドイツを中心に考察しつつ、国際比較や国際関係の視点が随所に見られる本書は、ドイツ以外の環境史を研究する者にと

つても、あらためて環境史とは何かを整理して考えるのに重要な示唆を与えてくれる。その意味で環境というテーマに関心を持つ幅広い読者にぜひ読んでほしい一冊である。

参考文献

- Barton, Gregory, 2002, *Empire Forestry and the Origins of Environmentalism*, Cambridge.
- Beinart, W. and Hughes, L. 2007, *Environment and Empire*, Oxford.
- Coates, Peter, 2004, 'Emerging from the Wilderness (or, from Redwood to Bananas): Recent Environmental History in the United States and the Rest of Americas', *Environment and History*, 10, pp.407-438.
- 藤原辰史, 二〇〇五, 『ナチス・ドイツの有機農業——「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」』 柏書房。
- Grove, Richard, 1995a, *Green Imperialism: Colonial Expansion, Tropical Island Edens and the Origins of Environmentalism, 1600-1860*, Cambridge.
- 1995b, 'Editorial', *Environment and History*, 1, pp.127-8.
- Guha, Ramachandra, 2000, *Environmentalism: A Global History*, New York.
- 石坂晋哉, 二〇一七, 『現代インドの環境思想と環境運動——ガンディー主義とくしながりの政治』 昭和堂。
- Jacoby, Karl, 2001, *Crime against Nature: Squatters, Poachers, Thieves, and the Hidden History of American Conservation*, Berkeley.
- Kirchberger, Ulrike, 2001, 'German Scientists in the Indian Forest Service: A German Contribution to the Raj?', *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, 29, pp.1-26.
- 水野祥子, 二〇〇六, 『イギリス帝国からみる環境史——インド支配と森林保護』 岩波書店。
- , 二〇二二, 「大戦間期イギリス帝国における森林管理制度と現地住民の土地利用」『歴史学研究』, 八九三, 四五-五六頁。
- 森涼子, 二〇二一, 「ドイツ自然・環境保護運動の歴史——研究動向と今後の展望をめぐって」『史学雑誌』 二二〇(四), 六〇-八五頁。
- Sutter, Paul, 2003, 'Reflections: What can U. S. Environmental Historians Learn from Non-U. S. Environmental Historiography?', *Environmental History*, 8, pp. 109-129.
- 田北廣道, 二〇一七, 「社会経済史学の再構成にむけて——ドイツ環境史の可能性(一)」『経済学研究』 七七(五・六), 七三-一〇七頁。
(みずの しょうこ・下関市立大学教授)

